

## The Ninth Wave - Ode to Nature

ステファン・ウィンター

なぜベートーヴェンなのか？ 私は彼の音楽の力に魅了されているが、それはしばしば民族社会主義と多くの独裁によって致命的に虐待されている。

彼の作品は啓蒙精神とフランス革命の精神に満ちているにもかかわらず、悲劇的にもベートーヴェンは意図せず**専制君主**の英雄になる。

ベートーヴェンはナポレオンがヨーロッパの貴族の専制政治を人道的な形態の社会に置き換えると確信して「エロイカ」を捧げるつもりであったが、ナポレオンの帝国宣言にうんざりして献呈を撤回した。

フリードリヒ・シラーの詩「歓喜の歌」に曲をつけたが、1985年に欧州国歌として歌詞がない「言葉のない歌」となり、**自由、平和、連帯、そしてその多様性におけるヨーロッパの統一のシンボル**となった。この有名な詩は、自由、平等、正義の紛れもない声明であるため、欧州国歌から削除されたと言うのは皮肉であろうか？

2013年、地中海のランペドゥーザ島沖で悲劇が発生した。船が沈み、545人以上のアフリカ難民が苦しんだ。船長はエンジンの故障後、緊急信号として毛布に火をつけたが、この火災は制御不能になり船は沈み、155人の生存者のみが救助された。

粉々になり、壊れ、裂け、「言葉のない歌」は無限の青に沈む。破滅的だ。

私の中では、海、カモメ、そして風の音が「歓喜の歌」と混在して鳴っている。音が聞こえるだけでなく、テオドール・ジェリコーの「メデューズ号の筏」—— 人間文明の失敗の象徴 —— が私の記憶に現れる。

フランスのメデューズ号は、1816年に以前の植民地を再び所有すべくセネガルに出航。中間甲板での火災の後、アフリカから約120キロ離れて座礁。数隻の救命ボートは特権階級者に取りられ、船員と兵士を乗せた仮設の筏が救命ボートにけん引される。重い筏は特権者にとって迷惑であり、ロープが切断され150人以上が公海で操縦できなくなる。事故から13日後に筏は発見され、10人のこの悲劇の目撃者のみが生き残った。画家ジェリコーはこのシーンを扱い「メデューズ号の筏」を描いた。

2013年の出来事が私の頭から離れず「The Ninth Wave」の制作を始め、作曲家の安田芙充央に話をした。当時、私はこの悲劇が数多く繰り返されるとは思いもしなかった。

「静かな海と楽しい航海 op.112」に基づいた安田芙充央の作品で始まり、さらに《フィデリオ》の「囚人たちの合唱」、他のベートーヴェンの作品の断片も同様に役割を果たす。最終楽章では「歓喜の歌」が鳴り響く。音楽は音の力と一緒に効果を発揮する。落雷を鳴らし、サイレンを鳴らし、風が鳴り、モールス信号を送る。

音楽とサウンドアートの作品は、第3の要素の映像の詩によって完成される。振付師の辻田暁の身体に映し出された画像は、9つの寓話、9つのシンボルを体現する生きた彫刻になる。

「The Ninth Wave - Ode to Nature」は、自然の美しさにおける人間の悲劇を語る。